



# 古道が紡ぐ物語



## 歴史ロマン溢れる葛城の道①

～柿本神社（葛城市柿本）から名柄集落（御所市名柄）まで～

日本最古の官道と言われる竹内街道から、葛城市<sup>ふえふき</sup>笛吹<sup>くじら</sup>、御所市<sup>くじら</sup>櫛羅<sup>くじら</sup>・名柄などを経て風ノ森に至る<sup>かづらぎさんろく</sup>葛城山麓沿いの古道を、葛城の道といいます。付近には、上代の遺跡から近世の街道沿いの美しいまち並みまで様々なスポットが点在し、見どころも豊富です。今回は、柿本神社（葛城市柿本）から名柄集落（御所市名柄）まで、歴史ロマン溢れる葛城の道沿いの史跡を辿ります。

### 新庄から葛城の道沿いの笛吹神社へー葛城市

近鉄新庄<sup>しんじょう</sup>駅から、まず葛城山麓沿いの近畿自然歩道、いわゆる「葛城の道」を目指す。近鉄新庄駅を出てすぐ西隣、葛城市役所新庄庁舎との間にあるのが柿本神社（葛城市柿本）である。主祭神として、万葉集最高の歌人との呼び声高い柿本人麻呂（660年頃～720年頃）を祀る。人麻呂は、石見守として



柿本神社（葛城市新庄）

石見国（現在の島根県西部）に赴き、かの地で没した。

その後当地に改葬された際、

傍らに社殿を建てたのが同社の始まりという。

柿本神社から1kmほど南西に進むと、大和六御<sup>やまとのむつ</sup>坐<sup>み</sup>社<sup>あがた</sup>の一つ、葛城御<sup>み</sup>坐<sup>あがた</sup>神社（葛城市葛木）がある。葛木（城）は、大和国に6つある「御坐（天皇直轄領）」の一つであり、同社はこの地に鎮座<sup>しきない</sup>する式内大社として名高い。ここから200mほど西に屋敷山古墳がある。国指定の史跡であり、ヤマト王権の成立に深く関わり権勢を振るった葛城氏との関連が指摘される。かつて、古墳の頂上には新庄藩（後の櫛羅藩、後述）の陣屋が築かれていたが、現在は一帯が公園として整備され、市民の憩いの場となっている。

墓（屋敷山古墳）の西にあるためにそう名づけられた博西神社を越え、500mほど西に進み山麓を上ると、置恩寺（葛城市寺口）に至る。同寺は、

行基の開創と伝わる古刹であり、中世に葛下郡<sup>かづげぐん</sup>を支配した大和布施城主・布施氏の氏寺として大いに栄えた。なお、同寺から700m西に山道を進んだ先、葛城山の中腹（標高400m）には、布施氏が築いた布施城址が残る。後に大和国を掌握した戦国武将、筒井順慶もこの布施城に入城した。

置恩寺からは、古代人の息吹を感じる葛城の道（近畿自然歩道）に沿って南下する。この道は、通称「山麓線」と呼ばれる県道30号・261号線を縫うようにして続く。交通は便利で見晴らしも良く、沿道には様々な史跡を擁し、歩いて楽しい。大和三山を左手に眺めながら3kmほど南下すると、葛木坐火雷神社（葛城市笛吹）に至る。火雷神<sup>ほのかづち</sup>（火の神）と、天香山命<sup>あめのかぐやまのみこと</sup>（奏樂の神）を主祭神として祀り、別名「笛吹神社」とも呼ばれる。

その地名や祭神からも窺えるように、ここ笛吹はヤマト王権に奏樂で奉仕した<sup>ふえふきのむらじ</sup>笛吹連の出身地である。彼らが祖神である天香山命を祀った「笛吹神社」と、その近くにあった火雷神を祀る「葛木坐火雷神社」がいつしか合祀され、現在の形となったと思われる。今なお同社には、消防士など火に関連する職業人や、フルートや尺八の奏者など奏樂の上達を願う人々が参詣に訪れるという。

ここ笛吹から、南にある一言主神社<sup>ひとことぬし</sup>へ至る道は、「一言寺道」と



葛木坐火雷神社（葛城市笛吹）

呼ばれた古道である。

### 葛城の道（一言寺道）沿いに名柄集落へー御所市

古く一言寺道と呼ばれた葛城の道を南進し、御所市に入ると、やがて櫛羅（御所市櫛羅）の集落に至る。クジラという珍しい地名は急傾斜地を表す「崩」が転じたとも言われ、かつては具戸羅などと表記されていたが、時の新庄藩主・永井直幹によって現在の表記に改められた。その後、櫛羅の発展に従い、新庄藩を承継する形で櫛羅藩が立藩。明治期の廃藩置県では櫛羅県となり、最終的に奈良県に編入された。

ここ櫛羅から 1.5km ほど南へ進むと、千体仏で有名な九品寺（御所市櫛原）に至る。同寺もまた、行基創建と伝わる古刹であり、葛上郡の有力国人であった櫛原氏の菩提寺である。また同寺の山門脇には、回遊式の庭園である十徳園がある。



九品寺の千体仏（御所市櫛原）

九品寺から一言寺道を 1km ほど南下すると、この道の由来である一言主神社（御所市森脇）に至る。同社の主祭神、一言主大神を巡っては、『古事記』（712 年成立）の記述が興味深い。

一雄略天皇が葛城山に登った折、天皇の一行と全く同じ格好の一行が、向かいの尾根を進むのを見つけた。「この国に、吾を除いて王は無きに、今誰人ぞかくて行く」。天皇が問うと、相手も同じように答える。怒った天皇が矢をつがえ、相手に名を名乗るよう迫った。相手も同様に矢をつがえ、このように答えた。「吾は悪事も一言、善事も一言、言い離つ神。葛城の一言主大神なり」。天皇は恐れ入り、弓や矢のほか、官吏たちの着ている衣服を脱がせて一言主大神に献上した。一言主大神はそれを受け取り、天皇の一行を見送った一

このように、天皇が畏れるほどの偉大な存在であった一言主大神は、時代が下るにつれその神威

を失っていく。

『日本書紀』（720 年）では天皇と対等な立場として描かれ、同書の続編にあたる『続日本紀』（797 年）では、狩りで雄略天皇と獲物を争った挙句、土佐国に流される。『日本



一言主神社（御所市森脇）

霊異記』（822 年頃）に至っては、一言主大神は役行者を朝廷に讒訴し配流に陥れ、その後復帰した役行者に報復され、今も解けぬ呪縛をかけられる。このように一言主大神が凋落した背景には、藤原氏など一部氏族への権力の集中により、地方神を祀る地方氏族が衰退した事実があると考えられる。

一言主神社には、もう一つ興味深い伝説を伝える遺構がある。神武天皇が葛の網で土蜘蛛を捕え、頭と胴と足の 3 つに分断して葬ったと伝わる「蜘蛛塚」である。ヤマト王権の支配に抵抗する先住民族を征服した事実が、勝者の歴史として描かれたと考えられるこの伝説は、やがて謡曲「土蜘蛛」として能の演目に派生。口から千筋の糸を吐き人々を苦しめる化け物として描かれた土蜘蛛は、最期には自身のねぐら、葛城山の塚で討たれる。

一言主神社から近畿自然歩道を 1.5km 南下した先にある名柄集落（御所市名柄）は、南北の高野街道と東西の水越街道との交点に栄え、中村家住宅（国指定重要文化財）をはじめ近世の美しいまち並みを残している。名柄は、2012 年から奈良・町家の芸術祭“HANARART”の会場となったほか、最近では昭和 50 年代まで名柄郵便局として使われていた古い建物を活用しようという動きもあり、今後の進展が期待される。

（2 月号に続く）

（太田宜志）



中村家住宅（御所市名柄）